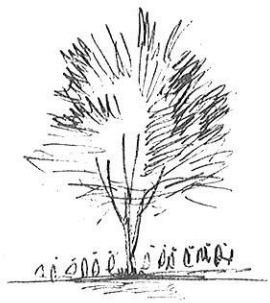
ひかりのこ

# 光の子



No.101　2002. 12. 25

● わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、
わたしにしたことなのである。（マタイによる福音書）

え・中島英子

クリスマスの祝福が
豊かにありますようお祈り致します

社会福祉法人　光の子どもの家

「父帰る」

拉致被害者帰国
身に入みてお帰りなさいといふ言葉
吹き晴れし空を広げてクリスマス
踏切のベルも加へて聖夜かな
登校の頬みな赤き霜日和
どの窓も夕日返せり社会鍋
冬蝶の壊れさうなる日向かな
誰よりも凍てし靴音父帰る

黛　執（『春野』主宰）

発行／社会福祉法人 光の子どもの家　TEL／0480-72-3883　FAX／72-6649　振替／00130－1－128022
編集／光の子 編集委員会　e-mail:khikari@ceres.ocn.ne.jp　〒349－1155 北埼玉郡大利根町砂原277　印刷／社会福祉法人 共愛会

# この世でたったひとつのクリスマス

施設長　菅原　哲男

児童養護施設光の子どもの家は今年十八回目のクリスマスを迎える。

光の子どもの家の建設を意図した時に描いた具体的なイメージは、笑顔で溢れるクリスマスの子どもたちである。

世界で一番楽しいクリスマスが経験できる家にしたいと願った。

建物が立ち上がった時、「これはいい！」と心の中でうなずいていた。光の子どもの家は、園庭を囲んで広い窓が庭を向いている。この窓に羅紗紙を貼って影絵で聖画を表現できる。またセロハン色紙で彩れば立派なステンドグラスになるのだ。

聖夜に行うキャンドルサーヴィスもデザインはあった。それに白川徹桐生教会牧師が手を入れていのちを吹き込んでくれた。また、これまで出会い大きな影響を与えられた巨きな人たちに深津文夫牧師がいた。彼はバッハの研究者でもあったので宗教音楽の造詣は抜群であった。その彼が、ドイツの民謡や聖歌から選んで翻訳し生誕劇のシナリオをつくった。シナリオといっても、演出の出来る幅が広く緩やかなしばりのもので手頃でもあり、とてもよくできていたのであった。それを懐にしながら夢を描いてこの家は建てられていく。それが、毎年それを楽しみに人々が集まってくださるクリスマスペジェントそのものである。

ここにやってくる子どもたちはみな人を信じられず、それ故に信じることに飢えてやってくるのである。失った家族からもたらされなかった家族のみにしか可能でない「愛」に飢えて。

ここにはそれを可能にするに足りる家族からの愛に溢れるように育てられてきた大人たちが待っている。しかし、むさぼり続ける子どもたちの要求に対応するのに、公が決めた「最低基準」では対応不可能でもある。皆様のお励ましやお支えをお受けして最低基準の倍以上の指導員や保育士を配置することが出来てきている。何と恵まれた「家」であることか。

しかし、その恵みもまた、子どもたちを充分にすることを出来ないでいる。それほど子どもたちの飢えや要求は凄まじいのである。

過去三年間、毎年一人ずつ燃え尽き症候群に冒されて職員がここから去ったのである。その表現の様態は一様ではないが・・。

どんなに愛が豊かであっても、人が出来る対応は限りがあることをその度に知らされ、職員たちの叫びを聞き取れなかった悔恨が積み重なっていく。

光の子どもの家を開設して間もない頃から、これでいいのだろうか、という自問がしばしばあり、この世界を切り開いてきている先達にお出でいただきながら学習を重ねてきている。それでも、重ねる失敗や愚行の数々。

子どものための子どもの施設を建設し、運営し続ける。ここを必要とする子どもが一人でもいる限り。これが光の子どもの家の理念である。理念と言うよりは当然すぎる目標である。この当然すぎる目標が達成されたことはこれまでない。子どもたちの暮らし＝lifeよりも、自らのそれを真っ先にする愚かしさ。自分の生涯の終わりが間近になって、ふと省みる自らの足跡。これも自分にだけ向いていることが絶対多数だ。彼らの生涯＝lifeをどれだけ優先することが出来たか。

クリスマスの季節、馬小屋から聞こえてくる、「大丈夫、それでいい、あとは私が落とし前をつける。このわたしのいのち＝lifeで！」という呼びかけが私たちをここまで導いてきてくれたのだ。

光の子どもの家にしかない、世界でたったひとつのクリスマス！おめでとう！





学者もどきのつぶやき ⑲

# 学長職ただいま苦戦中

山形大学
学長　仙道　富士郎

昨年九月一日に学長に就任したのだから、早いもので、もう一年三ヶ月近く過ぎてしまった。当初は入試ミスの処理、とくに入試ミスの被害者である受験生にたいする補償問題が中心的な課題だった。昨年の暮れ近くに、文部科学省が、国のお金で補償をやるという方針を決めてくれたときには、感謝の気持ちいっぱいで、小躍りしたことをいまでも記憶している。ところが、一難去ってまた一難となることなど、そのときは予想だにしなかった。

我が国ではいま、大変なスピードで少子化が進んでいることは、皆さんもよくご存じのことと思うが、それに随伴した現象として、教員の就職率が低下してきて、最近では教育学部を卒業しても、教員の正規採用になる卒業生は一〇パーセントぐらいである。文部科学省（省庁再編で文部省と科学技術庁が合併してこの名前になった）は、このような状況に鑑み、教員養成のあり方を検討してもらうために、教育関係者・有識者による懇談会を組織した。懇談会の結論は「基本的に国立大学の教育学部の再編・統合が必要である」というものであり、近県の大学同士で話し合いをすることを、勧める内容であった。山形大学、宮城教育大学、福島大学の三大学で話し合いをはじめ、種々検討した結果、教育学部の規模等々から考えて、山形大学教育学部は、将来教員養成を担当する大学になることを断念するということを教育学部教授会が決定し、大学執行部もこれを支持した。

ところが、少なくとも私には全く予想出来なかった事なのだが、教育学部教授会決定に反対する大合唱が山形県内に蔓延する結果になってしまった。

いま考えてみると、理由は色々あったと思えるのだが、当初は想像することもできなかった。教授会決定が行われたのが、五月だから、もう半年もこの問題は見通しの立たないままの状態が続いている。

そして、公式の場における学長、つまり私の不用意な発言が、事態を悪い方向に向かわせている結果になってしまっているという状況で、私の悩みはとても深い。

事情はこういう事である。

公開で行われる会議での私の発言が、翌日の新聞で大きく取り上げられ、それがまた物議をかもしだすということが、少なくとも二回はあった。そして、最も困ったことは、私にそのことについての病識がないということである。

あるとき新聞記者に、私が会議で話したことは、全体としては新聞記事になったようなことではなくて、もっと色々と話しているのに、どうして二時間半の会議の最後の数分間で触れたことだけを強調するのか問いつめたところ、「先生それは甘い。新聞記者はなにかフォーカスを求めてそこに集まっているのだから、たとえそれが一、二分の話でも、それがフォーカスだと思えば、そこだけが記事になるわけですよ。」と言われてしまった。マスコミのこうした報道のあり方を認めているわけではないが、嘘は書いていないわけで、いったん報道されてしまったことは、ものすごい力を発揮するということを、いやというほど実感させられている。

ほんとうにこのまま学長職を続けていけるのだろうかなどと、弱気になってしまうこともあるが、引き受けた以上は、どんなつらいことがあっても、完遂せねばなるまい。いきおいきばってしまう。最近はストレスがストレスを呼んだ結果の一つだろうか、突発性難聴になってしまった。一時期直ったのだが、再発し、ほとんど毎日耳鳴りに悩ませられている。今朝などは眼を開けたら、天井が回るような目眩まで起きてしまった。

自分の健康管理も出来ないで、なんで難局など乗り切れようか。少し、発想の転換をしなければなるまい。

## 訃　報

悼　福島勲前理事長先生。

草創からご苦労ばかりをおかけした先生が十月二十八日召天されました。謹んでお知らせ致します。

社会福祉法人
光の子どもの家
理事長　飯田　進
施設長　菅原哲男

# 2つの文化に生きる
## 35

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー　京　子

クリスマスおめでとう!

最近、「祈り」についてよく考えることがある。教会の集まり等で、長い祈りをする人もいれば、とても簡潔な祈りをする人もいる。小声で耳を一生懸命かたむけても聞き取れないような祈りをする人もいれば、一言一言はっきりと大きな声で祈る人もいる。語学的には英語で祈る人もあれば、日本語で祈る人もある。

今年始めに参加した宣教師大会では小グループ懇談の最後にそれぞれの母国語で祈った。英語、日本語、フィリピン語、中国語。祈っていることが全くわからない言語もあったが、その祈りの輪の中で心が満たされた経験をした。考えてみれば世界中ではいろいろな言葉で祈られ、神様はそのどれをも受け止めてくださっている。最近、私は祈る時、言葉にならない時がある。感謝の思いがあってもそれを細やかに言葉にうまく表せない。

願いがあってもそれを具体的に表現できない自分を見い出すのだ。でも、私はそれでもいいのだと思っている。なぜならば神様は言葉に言い表せない私たちの願いや思いをすべて察してくださっているからだ。言葉にならない祈りというのも私は悪くないと思っている。一番大切なのは私たちの感謝や願いや思いが神様に届いていることだからだ。「祈り」とは美しい言葉を並べるのではなく、何かテレパシーのようなものを神様に送り、神様がそれを受け止めてくださっていることを確信することではないかと最近思う。

クリスマスになると私は決まって思い出す物がある。それはプレゼントと言えば、アメリカで必ず登場するあの愛らしい「TEDDY BEAR」(くまのぬいぐるみ)である。

実はこの「TEDDY BEAR」にまつわるかわいい「祈り」の話がある。

数年前出席したアメリカの教会の聖日礼拝のお話である。あるところに小さな男の子がいた。その子の家族はつい最近、引っ越してきたばかりで周りは知らない人ばかりだった。お友達が全然できないこの子は毎日寂しくて寂しくて神様にこう祈った。

「神様、どうか僕のTEDDY BEAR を動かしてください。本当の動物みたいに動かしてください。そうしたら僕は僕のTEDDY BEAR と一緒に遊べるから。神様、僕はあなたを信じています。あなたは何でもお願いをきいてくれる方だから。」

この子はこのお祈りをくる日もくる日もくり返し、ある時は涙してまでも祈ったけれど、TEDDY BEARは一向に動き出す気配はなく、ただ、聞こえるのは外で遊ぶ知らない子ども達の楽しそうな遊び声だった。結局この子はTEDDY BEAR は動かないのだとがっかりしながら外に出て、知らない子ども達と友だちになり、楽しく遊ぶようになった。実はこの子の頭には神様は僕の祈りをきいてくれなかったという気持ちがずっと残っていた。しかし、何年かたって青年になり、もう一度神様のことを深く考えるようになった時、ある事に気がついた。「あの時、神様は僕の祈りを聞いていてくださったのだ。僕がTEDDY BEAR を動かしてくださいと祈った時、僕の心の中の本当の気持ちは、神様、僕は友だちもいなくて知らない土地に引っ越してきてとても寂しい。神様、助けて下さい。ということだった。僕は祈っているうちに神様から力をいただき、勇気を出して外に出て友だちと遊ぶようになった。祈りを通して神様は僕に勇気を出しなさい、君は一人ではないよと励ましていてくださっていた。」

実に神様は言葉の奥に潜んでいるこの男の子の言葉にならない心の叫びをしっかり受け止めていて下さっていたのだ。祈りは必ずきかれるとは、神様は私たちの祈りをしっかりと受け止めていて下さることなのだ。祈りには、実は多くの言葉は必要ないのではないだろうかとも思う。

「神様、今日も命を与えて下さってありがとう。すべてがあなたの御心のままになりますように。」メリークリスマス!イエス様お誕生日おめでとう。

エッセイ

# 主夫奮闘記

彫刻家　中島　睦雄

家内がケガをした。ほんの少しの下りの坂道で、左足をすべらせ、アスファルトの道路に左足のヒザを打ちつけてしまったのである。どう見ても何のことはない普通の道なのであったのだが。

こんな状況を考えると「やっぱり年令だよ」と思いたくなるかもしれない。しかし、それを言うのは残酷である。ただ、しっかりと足が上がらなかっただけであり、力強く大地を踏みしめる事ができずに転んだだけなのである。

しかし、それができなかったということはやっぱり年令か?でも本人にはそうは言えない。

そんなことで、病院では足首からももに至る大きなギブスを作ってくれた。ギブスをはめられた左足は大変に重い。そして、当然のことながら至って不便である。

それでも、炊事や洗濯など、部屋の中の仕事は何とかやれた。

或る朝、台所の板の間で、車の付いた便利な椅子に腰かけた家内は、ギブスの関係で浅くこしかけたのが不運なことに、椅子が後に逃げてしまい、重いギブスと一緒にドスンと尻もちをついてしまったのである。

腰のあたりを圧迫骨折とかで、動くことができず、救急車で入院となってしまった。

このことによって、二人暮らしだった私は、単身で主夫となってしまったのである。その日から、家事一切を私がやらなければならない。

常日頃、家内は私に「主婦の日立たない仕事をバカにしないでね。」と言っていた。もち論私は「決して主婦の仕事をバカにしませんよ。いつも敬意をはらっていますよ。」と答えていたものだ。

主夫となった私は、先ずごはん炊きをしなければならない。病室で教えられた炊飯の手順を手帳に書き取って、それにしたがって仕事をすすめる。米を研いだら三十分以上時間をとる事、次は炊飯器の時間をセットして…。なかなか時間がかかる。

朝晩のぬかみその扱いも大変だ。キュウリやカブを漬け込み、必ずぬかみそをかきまわすこと、しかもゴム手袋の使用はダメ。素手で。いやはや手がぬるぬるで仕方ないので、洗剤で手を洗う。

食器洗いと拭きとりはお茶の子さいさいである。両手にふきんを持ってどんどん拭きながら棚に納めれば良い。

洗濯だって、どうということはない。粉石けんを入れてスイッチを押せば、機械がやってくれる。ところが、干上がった洗濯物をたたむのが一苦労であった。うまくたためない上に、引き出しに納めるのが非常にやっかいである。これだけは本当に嫌になった。

これらのことも、家内の入院から四、五日はどうにかやった。しかし、一週間、二週間となると、さすがの主夫も疲れ果てた。夜などは、ビールを飲んでインスタントラーメンを食べ、風呂にも入らず寝てしまう。

翌朝起きてみると、東からの光線に、廊下のすみのあちこちに、綿のようなごみが浮いている。掃除機をかけるヒマはない。わかっていながら出かけなければならない。

夕方病院へ行ってみると、家内の怪我の様子は順調に恢復している。ありがたいことだ。私は、思わずグチを言う。「家の中の仕事も大変だよ。何から何まで一人でやるんで、参ったな。」彼女は嬉しそうに言う。「主婦の日立たない仕事をバカにしないでね。」私は答える。「決してバカにはしてませんよ。いつも敬意をはらっているよ。」「あ、そう。そりゃあ、ありがたいね。しっかり頑張ってね。病院はね、全部上げ膳すえ膳だから、とても良い所よ。当分ここに居たくなっちゃった。」余り深刻でない病人は、こんな調子なのだが、彼女の入院による被害者は、私だけではない。家の猫もその一人である。いつも夜になるともぐり込むふとんに、彼女がいない。「バアチャンはどこへ行ったの?」という感じであたりを探している。いつもエサをくれるバアチャン、いつもヒザの上に乗せてくれるバアチャンが、いつもの所にいない。猫も、ふだん思いっきり甘えていただけに不安な表情である。

約一ヶ月たつと、家内の状態が予想以上に良くなり、退院することになった。久し振りに帰って来るんだから、玄関に花でも飾ってみようと思って、赤や黄色の花を買いこんだ。ふと気がついてみると、玄関先は落葉だらけである。あれ以来、箒を入れていない。これでも人間が住んでいるの?という感じになっている。

私は約一ヶ月の主夫としての体験から、決して主婦の目立たない仕事をバカにしないことにした。そればかりか日本全国の主婦の皆さんに、改めて敬意と感謝の念を贈ることにしたのである。

# おめでとう

☆　☆　☆

光の子どもの家のクリスマス

中三　恵子

私が光の子どもの家で迎える三度目のクリスマスです。

今、ここで迎えたはじめてのクリスマスは、すごく幸せだったことを思い出します。

大勢の仲間たちやお客様をお迎えしてのクリスマスは、私にとってはじめてのことでした。食事も美味しいし、あったかいなぁってこころから嬉しかった。クリスマスってこんなに楽しく暖かいものだなんて思ったことさえなかったものだから、だからはじめての時には驚きのような強い印象だったのです。

昔から光の子どもの家で暮らしているみんなには、これが普通なのかも知れないけど、私にはそれが、感動的なものだったのです。大きな幸せを体いっぱいに感じたことは忘れられません。

プレゼントをもらえるのも嬉しいけれど、二十四日のイヴキャンドルサービスは、メッセージと職員たちの讃美歌などで夢のようです。そして二十五日のページェントとクリスマス会…。

今年もまた光の子どもの家で迎えるクリスマスに気持ちが高まってきます。また、きっと幸せを充分味わいたいと思っています。

メリークリスマス!

☆　☆　☆

こんなクリスマス! いいな!

中一　華美

毎年、この家では、十二月二十五日にクリスマスページェントが行われます。

イエス様がお生まれになったことを表現して祝うのです。

私たちは毎週教会学校に行っています。讃美歌を歌い、聖書を読んでいます。もう一つ、かみさまに、『お祈り』もします。

神さまってすごいですよね。みんなのことが守れるなんて…。

今年のクリスマスは、自分の役割をしっかりやって、すてきなクリスマスページェントにしたいと思っています。

神さまがきっとすてきなクリスマスにしてくださるように。そして「これからもお守りください」ってお祈りします。

☆　☆　☆

メリー　クリスマス

中一　乃衣

私は今年「光の子どもの家」に来て、はじめてのクリスマスを迎えることになります。今までとはずいぶん違うんだなと感じています。

けれど、光の子どもの家に来て、結構おもしろそうだな、と期待し始めています。

光の子どもの家に来てはじめてのクリスマスを楽しくできればいいと思っています。

☆　☆　☆

クリスマスおめでとう!

中三　詩美

毎年、毎年やっているクリスマス。でも~、毎年、毎年違うクリスマス。

今年のクリスマスは、今年だけで、一度限りだ。もう一生やってこない。

クリスマスは十二月二十四・二十五日だけど、私の中では十一月末頃から始まっている。それは、デパートとか街にきらきら灯りがついたり、賑やかなクリスマスソングのせいだけではない。もっと大切なことは、クリスマスの前の四週間はアドヴェントという、クリスマスの準備の期間を毎年光の子どもの家で過ごしてきたからだ。

練習することや飾り付けなどだけではなくこころもしっかり準備して、みんなが楽しく過ごせるように・・。そんなクリスマスを大切に過ごしたい。

クリスマス、おめでとう!

☆　☆　☆

メリークリスマス

高二　福子



# くりすます

あっという間に、クリスマスの季節になって、だんだん冬らしくなったと思う。いつの間にか年月も経って、自分の変化に気づいた。体と心の。

クリスマスは私にとって大切な日でもあります。

「イエスさま」がお生まれになった日なのですが・・。これまで、私は教会に毎週行き、牧師さんお話を聞いてきた。信じるか信じないかで、何かが変わるのだろうと思う。私はそこのところを微妙に感じている。

これから、様々なことで悩んだり、考えたりしていくわけだが、どんなに困難でもがんばり抜く力をつけたいと願う。あと、一年半で社会に出るという大切な時がやってくる。その時、ここに住んでいるみんなのためにも、夢に向かって進んでいきたい。

今年のクリスマス。大切にしながら、生涯忘れられないものにしようと思う。

メリークリスマス!

☆　☆　☆

私にとってのクリスマス

高一　ヒロミ

私にとってクリスマスとは、今まであまり大きなイベントではありませんでした。そのせいか余り記憶に残っていません。でも、「光の子どもの家」に来てからは、本当に毎年毎年クリスマスがとても楽しみです。今までに見たことがない盛り上がり、そして美味しいお食事、たくさんのお客様、そしてページェント。こんなに本格的なクリスマスを経験できるなんて、私たちはすごく幸せです。

クリスマスの四週前の日曜日が第一アドヴェント、そして第二、第三、第四アドヴェントと、どんどん内容に入り込んでいき、私たちのこころもクリスマス一色になります。

クリスマスの日は、自分たちももちろん楽しみますが、ページェントを礼拝として行います。それがお客様も一緒になって楽しみ、意味をそれぞれが受け取るのです。

二十五日の朝、私たちの枕元にはクリスマスプレゼント置かれています。幼い子どもたちもそうですが、私もこんなに大きくなっているのにすごく嬉しいです。あまり顔には出しませんが、本当は私も幼い子どものように素直に喜びます。

こんな風に、以前はあんなに小さかった私のクリスマスは、この家に来てからというものどんどん大きくなって、すごく楽しみなものになっています。この家に来て、「クリスマス」の本当の楽しさ、暖かさを知ることができて、私はとても幸せです。

これからも、私にとってのクリスマスとは、大好きなものに育っていくことでしょう。

この年も、みんなが喜ぶクリスマスにできるといいです。

☆　☆　☆

クリスマス

高三　沙慧

今年もクリスマスがやってきます。私が「光の子どもの家」で過ごすクリスマスも最後になります。そんな風に思うと寂しい気分になってしまいます。

大人と子どもがふだん口に出さない自分の気持ちや感謝などのメッセージを伝え合い、讃美歌を大人が歌い、それぞれ割り付けられた聖書を読んで預言からイエスさまのご降誕までをたどるキャンドルサービス、イエスさまのご降誕の様子を聖書朗読、讃美歌、歌、振り付けなどで全員でするページェントなど、クリスマスの思い出はたくさんあります。そしてそれは、とてもすてきな宝物のような時間の積み重ねです。

『よいクリスマスを迎えよう』私はクリスマスが近づくとこころからそう願います。そしてそれは毎年そう願いながらやってきたんだなと思います。だから、クリスマスと光の子どもの家はしっかりと結び合い、私たちのこころを育ててくれたのだと思います。

さあ、ここでの子どもとしての最後のクリスマスだ。みんなでよいクリスマスを迎えよう!

☆　☆　☆

クリスマスに想う

高三　一志

今年が、僕がこの「家」で迎える最後のクリスマスです。

クリスマスに特別な思い入れがあるわけではないけれど、時の過ぎていくことの速さを実感しています。

僕にとってのクリスマスは微妙です。というのも、ページェントの練習やこの作文など、面倒なことも多くあります。でも、美味しい夕食やプレゼントをもらえるということもあるからです。

そんなクリスマスも、今年で終わりと思うと、大変嬉しくもあり、ほんの少しだけ寂しいです。

これから先、僕はどこでどんなクリスマスを迎え、送るのかまったく分からないけれど、多分、この「家」で過ごしたクリスマスに大きな影響を受けると思います。

その意味で、今後の自分のために、また来てくださるお客様たちのために、いいクリスマスにしたいと思います。

何よりもそうなるためには自分がその過程を含めて楽しむことが大切だと想っています。

# プリズム

## 原田家日記

クリスマスおめでとう。

冬の空に星座がますます冴え渡る今日この頃、みなさんお元気でお過ごしでしょうか。前回号でもお知らせいたしましたが、私のグループに中三の渡海賢君が加わりました。賢君が仲間に加わってから変化したこと、それは今までグループ内最年長でしっかりしようと頑張っていた小四の和希に兄的な存在ができたこと、ちょっとしたことでも笑ってくれるので笑い声が絶えないこと等、大変な思いをたくさんしてきたにも関わらず、とてもしっかりとしていて、未熟な私は助けられてばかりで「ありがとう」の気持ちでいっぱいです。そして賢君がやって来て変わったことは何と言っても…「おかわり！」と言う声が増えたことです。食欲の秋ということもありますが、夕食時にごはんが1升では足りず（以前は七合程度で足りていた）さらに急いで焚き足したりということもしばしばで、調理の方にも「原田家は多めに。」と気を遣ってもらうほどです。この食欲でみんなが厳しい冬の寒さも、困難な事も乗り越えていければと願うばかりです。相良有美

## 光の中で　佐藤家

メリークリスマス!!

体の芯まで冷え込む寒さが続いていますが子ども達は元気一杯です。野球に熱中している子ども達の喚声を聞きながらこのプリズムを書いています。

私のグループには小学二年生の貴と小学六年生の泰智の二人の男の子がいます。いつも騒々しい（?）日々を過ごしています。「男の子はこうでなくちゃ」とは思うのですが、ついつい小言を吐いてしまう耐性のない担当者であります。「これでいいのかな?」「私の関わりは間違っていないか?」と解答のない問題に頭を抱えている毎日です。子どもの内に秘めた力はすごいものです。貴は自分の気持ちを言語化できるようになりました。ひらがなも漢字も読みやすく、力強く書けるようになりました。本を読むのが大好きで、就寝前の読書は欠かせません。小さな頭の中でいろんなことを想像し、考えているようです。時にはびっくりするようなことを話すことがあります。私のあかぎれの手をとって、「ここに（手の真ん中）に神様がいて、神様のパワーで（傷を）治してくれるよ」と貴の口からでたときには驚きとともにすごく心が温かくなりました。人を思いやれる心が育ってきていることを改めて感じました。貴の心が真っ直ぐに育っているのも心を遣ってくださる皆様方のおかげだと感謝しております。もうすぐクリスマス。貴、泰智にとって光の子どもの家で迎える初めてのクリスマスです。いつまでも忘れられないクリスマスをと思い、今からない頭でいろいろと考えています。皆様もよいクリスマスをお過ごし下さい。

山口　麻衣子

## 河のほとりで　倉澤家

クリスマスおめでとうございます。

子どもたちと共に穏やかなクリスマスを迎えることができることを心より感謝しています。

イエスキリストのように全世界の人々に祝福される…という訳にはいきませんが、十月、私も誕生日を迎え、子どもたちから心のこもった贈り物をもらいました。

誕生会当日は、「倉ちゃんは黙って見ていられないから美喜ちゃんと出かけていて。」と言われ、娘と二人で外出させてもらいました。私の外出中には、プレゼントの準備、部屋の飾りつけ、夕食の準備と大忙しだったようです。私が帰宅した時には、まだ準備中の状態でしたが六時には準備も整い予定通り誕生会が始まりました。

子どもたちの作ってくれたグラタン、サラダ、ケーキそれに私のおみやげのチキンとパンが加わり、食卓が賑やかになり、退所した有希子も





遠くから駆けつけてくれ、楽しいひと時となりました。

施設で暮らすということで、〝誰かにやってもらう〟ことが多く、〝やってもらうこと〟が当たり前になりがちな子どもたちですが、私の誕生会を誰の力を借りることなく、自分たちで計画し、準備してくれました。「自分以外の誰かの為に何かができる。」－こんな子どもたちの成長こそが私への一番の贈り物であったことは言うまでもありません。来年はどんな贈り物がもらえるのか、今から楽しみな担当者です。

倉澤　智子

## 子どもたちの季節　仙道家

クリスマスおめでとうございます。

光の子どもの家で二度目のクリスマスを迎えようとしている和哉。

和哉には、家族の関わりは全くありません。

平成十二年度の終わりに、乳児院からやってきた和哉です。その頃にも、父、母や家族のイメージが全くありませんでした。

一緒に生活していく中で他の子どもたちの家族が来訪したり、泊まっていくのを見て来ました。また、今年度からは幼稚園に通い始め、幼稚園の行事でクラスのお友だちと家族のやりとりを目の当たりにし、和哉の中で、〝お父さん〟、〝お母さん〟というものが、世の中にいるのだ、ということがわかりました。

そして、他の子には、お父さんやお母さんが会いに来るのに自分には来ない、という違いも意識できるようになったからか、他の子どもの家族がいらした時に「いいなあ。」と羨ましがったり、おしっこを何度ももらしたりするようになりました。

家族の来訪があった場合、他の子どもは不安定になるのは当たり前のことで、和哉も当たり前の表現ができるようになったことは、〝成長〟と捉えたい担当者です。

でも、家族の関わりがない和哉に対し充分なケアができているかと言えば、とてもとても不充分です。

「和哉ちゃんのお母さんのお家、とおいんだよね。」

と、他の子どもたちに話す和哉を見て、胸が痛くなりますが、私より、もっともっと心を痛めているのは和哉です。

神さまに和哉の想いが届きますように。

池田　裕子

## あかり窓　心理室から

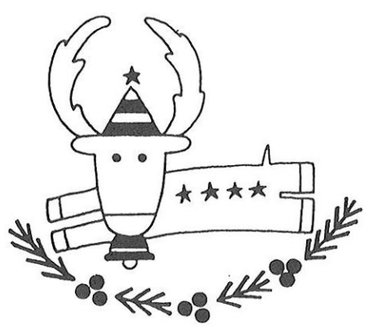
クリスマスの祝福のごあいさつを致します。

今年の秋は短く、一気に寒さが襲ってきた感じがしますが、泰智くんはそんな収穫の秋も終わりに近づいた頃入所してきました。

初めて私が彼と食事を共にした時のことです。私は隣にいる子どもと手遊びをしていました。そして泰智くんの修学旅行のお土産をいただく時に軽く「いただきまーす」と言い、その時に泰智くんが私をじーっと見ていることに気づいたのです。彼は「いただきますは?」と言います。聞こえていなかったのかなぁと思い、泰智くんの目を見て「いただきます」と言い直しました。その後、「泰智くんいただきます」という声が聞こえてきました。この「泰智くん」とつけることが大事だったのです。

どんなに心をこめて「いただきます」と言ったとしても、相手にその心が届かなくては意味がありません。家庭のような食卓を目指してはいますが、やはり大家族を超えてしまうほどの人数での食事です。その中で心を届けるには、言葉がより大切になってきます。しかも泰智くんは入所して間もないのです。周りの人の言動や思いが気になっていたでしょう。初対面の私が泰智くんの存在を気にかけているかを全身のアンテナを緊張させてじっと観察し、「泰智くん」と呼びかけるかどうかは私の心を計るバロメーターだったのだと思います。その緊張感に気づけず、思いを汲んだ行動ができなかった私は、まだまだ心理として未熟だなぁと反省しきりです。「泰智くんごちそうさま、ありがとう」と最後にもう一度声をかけましたが、私に一つの気づきを与えてくれてありがとうの気持ちも添えたいと思います。

積　みどり



養護メモ 95

# 児童虐待防止法とクリスマス

菅原 哲男

二〇〇〇年十一月児童虐待防止法が制定施行されて三年目に入った。この法が動き始めてから子どもたちの状況は激しく変動した。何よりも、虐待というコトバが市民権を得たのである。これまでこの国で虐待はそう変わらない質量で行われてきたものだろうと思われる。怖いものに『地震・雷・火事・親父』というものがあり、親父からのしつけと称する折檻は古典落語などからも明らかである。昨今の親父は生や粗大の冠をつけたゴミ扱いされて、並んでいた超人的な地震雷などの地位から激しく脱落してしまってはいるのだが。

それにしても、『虐待』という言葉は大きな後ろめたさを感じないでは日常的に使うことができず、これは日の当たる場所には存在することを許されない歴史が長かったのである。ところが、この両二年ほどの間に、マスコミや行政、あるいは物書きなどが一斉にこの言葉を何のケレン味もなく使い始め、アッという間に日の当たる場所に突出して表れ、市民権を得てしまったのである。

この児童虐待防止法が成立の条件として三年後に見直しをするという規定があり、その改正作業が始まっている。この法律の改正の仕方によっては、それに連動して改正が予定される児童福祉法の改正のあり方に大きな影響を与えるものと思われ、論議が盛んである。

この春遅く晃子が離婚の相談に来た。三歳になる子どもがあるのに。

元々結婚するといった時、式はしないと言っていた。長い歴史を経てきた儀式が何の意味もないものだったらとうになくなっただろう、と説得し、職員や子どもたちも出席させてもらって式と披露宴を光の子どもの家でした。だから、家族でしばしば来ては食事をし、語らっていた。このところ夫君の姿が見えないと心配していた矢先だったのである。

夏休みに入る頃は子どもを連れて家を出て、友人宅に居候していた。何度かやり直すように働きかけたが、晃子の考えは動かない。夫君も夫君の実家でも心配してそれぞれ相談にこられた。秋口にはとうとう晃子は、私たちが家庭調査をして探し出し、関係づくりをしてきていた実母宅に帰り生活をやり直す。子どもは夫君の両親宅に預ける。晃子は少し遠いが週に一回以上子どもと過ごす時間をできるだけ長く持つ。などを確認して籍はそのままにしての別居となったのであった。

朝晩に暖房が欲しくなってきた十一月半ばに、晃子から竹花信恵に、『私たちやり直すことにした。菅原に報告したい』と連絡が来た。びっくりよりも嬉しかった。時間の調整をして、それでも随分待たせて、晃子家族と夫君の両親の報告とご挨拶をお受けした。

経過だけを記せばこんなものだが、長いこと晃子を担当した竹花は、「私の育て方が・・。」と溜息をついてはうつむいた。私は、「私たちが頑張れば何とかなるようなものではないんだ。出来ることをしながら、彼ら・・特に晃子のこころの変化を待つより方法がないんだ」などと慰めにもならない話をしていた。

祈りながらじっと待つ、何も出来ない時間を頑張って待つ。子どもたちの成長にはそんな関わりしかできないことの方がめっぽう多い。

イスラエル民族と主なる神との契約とそれへの違犯の連続が旧約聖書に記されている殆どである。はらわた痛むその違犯に対する怒りと赦し…。そしてまた主なる神は民と契約を結ぶ。滅亡に至る人類の最後の最後。イエスによる新しい契約の実現がクリスマスの出来事なのである。

祈りながら待つことの意味。それが子どもを育てる私たちの苦しみであり痛みであり、それを突抜けた赦しによる希望なのである。

光の子どもの家建設以来十八回目のクリスマスまでに八十名の子どもたちとここで出会った。ここを利用した最年長の「子ども」が二十六歳である。一般に上昇し続ける子どもの自立の年齢。人生五十年～六十年といわれた時代の産物が二十歳成人である。今は人生八十年～九十年時代。子どもの自立の年齢が上がるのは当然とも言える。児童養護施設光の子どもの家は定員三十名だが、実際に関わりの必要な者たちは八十名であるといえる。児童福祉法や児童虐待防止法など児童に関わる法律は児童の年齢を十八歳に据え置いたままである。本当の社会的自立まで待つには二十五歳ぐらいが児童の年齢と考えた方がいい。

社会的自立という彼らの家族が失くした子どもたちの救い。その約束実現の日まで私たちも待とう。





現場から

# 続・光の子らしく ⑬

岩崎 まり子

日向ぼっこが楽しみな季節になってきました。皆様、お元気ですか？

早いもので、ここで迎えるクリスマスも十八回を数える程になりました。

「このままじゃ一緒にクリスマスを迎えられない！」と、夜遅くまで職員と、また子どもたちと話し合ったクリスマスもありました。家出したままの子どもを待ち続けたクリスマスもありました。たくさんのお客様を見送りがてら見上げた空に冴え渡っていた星々…。

珠弥ちゃんも、そんな、クリスマスを一緒に迎えられなかったうちの一人です。彼女は、生後間もなく兄と二人、母に置き去りにされていたところを保護され、乳児院へ預けられ、二才の誕生日前に、兄が一足先に来ていたここ、光の子どもの家にやってきました。真ん丸なほっぺに愛敬のある、これまた真ん丸な鼻のかわいい女の子でした。とても頭のいい子でしたが、大きくなるに従って対人関係のトラブルが増えていき、彼女を一番長くみてきた最初の担当者が辞めるとその傾きは一層激しくなりました。二人目の担当者は、摂食障害や学校の部活の顧問まで巻き込んだ人間関係のトラブルに悩み、こちらでも学校でも何度となく話し合ってきました。そして、中2の年度途中で私が担当することになったのでした。

当初、私が彼女への関わりで最も腐心していたのは、彼女の言動に巻き込まれないようにすることでした。あちらに行ってはこちらの悪口を言い、こちらに来てはあちらの悪口を言う彼女に、話は聞くけれど流すという関わりを続けました。そして、同時に、最初の担当者との連絡を再開し、協力をお願いし、彼女が泊りに行かせてもらったことも少なからずありました。全て、彼女により良いサービスを提供しようと思ってしたことでした。けれど、ある事件をきっかけに彼女は出ていってしまいました。

今思うと、彼女のためにといろいろ考えたつもりの一つ一つの事柄が、私の逃げだったのだと認めざるを得ません。私には、彼女を受けとめる自信がなかったし、受けとめようという覚悟もなかった。このことは、私にとって一つのくさびになっています。

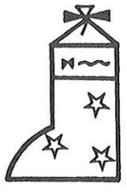
あれから様々なことがあり、私は彼女の面会のために鑑別所へ行き、少年院へ行きました。〈私なんかが会いに行っても喜んでくれるわけがない。何も出来なかったのだから。逃げていたのだから。この面会は自己満足でしかない。こんなことが許されるのだろうか。〉そう思いながらの面会でしたが、意外にも彼女は喜んでくれたようでした。それだけ孤独だったのでしょう。しばらくして彼女から手紙がきました。そこには感謝の言葉とここでの誕生日、クリスマスのあたたかさを出ていって初めて知ったということが書いてありました。退院後は、母と暮らすと書いていました。

もう彼女は退院したと思いますが、どこでどんなクリスマスを迎えているのか気になります。

何故こんな私が、こんなに長くここで働くことを許されているのか。

星々の瞬きに導かれるように、かつて共にクリスマスを迎え、今は目の前に居ないあの子たちのことを、あの日々のことを思い出すとき、何か答えを与えられているように思います。クリスマスのメッセージをあの子たちにも…。「あなたは、例え親に望まれなくてももっと大いなる者に望まれたからこそ生まれ、今も生きているんだよ」

クリスマス、おめでとうございます。



## 日誌抄 ＝子どもと創る暮らしの風景＝ 2002年6月1日 ▶ 7月末日

6月
幼児１０名 小学生８名 中学生６名 高校生８名 計３２名
５日 加須市しずくの会構内整備ご奉仕 感謝
６日 バザー準備 しずくの会 後援会 光の子どもの家職員で値段付けなど
８日 雨の予報だったがよいお天気になり第８回光の子どもの家定員外職員確保のためのバザー開催 聖学院大学 青山学院大学キリスト教学生会 共栄短期大学や元実習生などたくさんのボランティアに応援されて盛会裡に終了
１０日 一人ひとりの子どもたちの夏休みの計画を作成し検討を始める
１５日 開設初期からご支援の東京電力の児童養護施設支援のボランティア団体「ハム子会」役員２名が来訪し情報交換など
１６日 東京医科歯科大学院など院生、教授２名が来訪
２２日 埼玉県指導監査
２３日 アメリカ合衆国カリフォルニア大学ディヴィス校より実習生２名来訪 １１週間の実習が始まる
今月の物品ご寄贈者 若柳慶雅 慶久美 後藤利子 松本静江 宮崎晴子 新井榎子 中村久美子 桜井玲子 宮崎小百合 鳥越宏子 坂本和加子 榎本スミ子 松本繁子 桑尾妙子 宝月寿子 梓沢あづさ 島崎なぎさ 市川千代子 斉藤良子 鎌田和子 田部井竹子 網取八重子 岡美子 小谷野利子他３４名の各位様

7月
１日 今春高校卒業して働きながら看護学校に進学した多歌音が職場・学校双方の不適応を毎週来て訴える前向きに励ましながらの後保護が続く
４日 日本社会事業大学加賀美ゼミ約２０名光の子どもの家の成立や真実告知・専門性などについて意見交換
１０日 朝霞市の蕎麦組合の方々の手打ち蕎麦会実施 回を重ねて親しむ蕎麦職人さんたちと子どもたち
１４日 菅野クリニックより菅野ドクター来訪
１６日 晃子夫妻相談来訪
１９日 夏休みオープニングパーティ 園庭でバーベキュー 花火などをしてこの夏の課題と決意表明
○ 祐 母宅に帰宅訓練 久しぶりの家庭引き取りの可能性
２４～３１日 幼児グループ 小学生がそれぞれ八ヶ岳の谷本清光画伯のアトリエで宿泊楽しい思い出の第一陣
２９日 福島勲前理事長を施設長と岩崎保育士がお見舞い 一段と細くはなったが変わらないユーモアと厳しい現代批判に胸をなで下ろす 祈、ご回復
今月の物品ご寄贈者 野本百合子 落合美佐子 小林千江子 白石澄雄 堀沢まり子 平野房子 柴田貴志 栗橋タカラブネの各位様

おかげさまで１８回目の夏休みが始まりました 皆様のおかげで、こんな暮らしの風景が続きます 感謝（くら）

## 反射光

☆メリークリスマス！☆この季節は子どもたちの色彩の豊さが一年の中で飛び切りです☆その彩りのお裾分けのクリスマス特集です☆思春期真っ最中の中高生に絞りましたが微妙な表現に潜む本音をお聞き取りください☆児童養護施設の職員の半数以上に燃え尽き症候群の兆候が見られる、とアンケート調査の結果報告を立正大学の研究グループが発表し問題提起しました☆子どもたちが抱えてくる『問題』の質量は月が変わると来る子どもたちの表情や問題の表現ががらりと変わるほど激しいのです☆昨日と同じ姿勢で今日の子どもと関わろうとすると壁にぶち当たり怪我をします☆特に激しいのが親たちの持つ病的な要因です☆これには児童相談所の大半の機能は殆ど役に立ちません☆児童虐待防止法の改正のプロセスも現場と共時しないととんだアナクロニズムに陥ること必至です☆労働として子どもに関わるのではなく労働を終えほっとして帰る家庭に近づくよう励みます☆ご支援を、更に！ （哲）